

柏木弘雄著

大乘起信論の研究

— 大乘起信論の成立に関する資料論的研究 —

一 色 順 心

本書は、『大乘起信論』の成立に関する資料論の立場から、『起信論』の成立についての問題点を立体的に解明しようとした労作である。周知のごとく大乘佛教の秀れた綱要書ともいべき『起信論』は、中国及び日本における佛教教学の諸分野においてしばしば依用され、しかも佛教各宗の教義の中には『起信論』が理論的な基礎づけを与えているものも少なくない。

『起信論』研究の長い歴史を通じて著された註釈書類は、他の佛教経論のそれと比して膨大な量にも達し、幾多の研究成果が発表されて今日に至っている。中でも従来『起信論』の註釈研究は、華嚴教学における理解に代表されるように、法蔵（六四三—七二二）の『起信論義記』を模範とすることによって論の解釈がなされてきたといえる。ただしこのような華嚴教学における『起信論』の理解は、後世に多大な影響を与えたものの、『起信論』自身の意図するところとは必ずしも同一でない面を

有すると考えられる。本書の著者は、『起信論』の思想そのものと、後代の中国佛教教理において展開したいわゆる「起信論思想」なるものとの差異を意識的に区別している点で、これまでの『起信論』解釈に対して新しい見地に立つものである。すなわち註釈書を通してみた『起信論』ではなく、ひとまず註釈書の立場を切断して論自身の思想そのものを浮彫りにすることに努めている。このたび柏木弘雄博士が世に問われた『大乘起信論の研究』は、その副題に示されるごとく「起信論の成立に関する資料論的研究」に限定せられ、『起信論』の成立に関してこれまでに論じられてきた新旧の資料の検討及び整理が施されたうえで、自らの方法論に基き周到なる所論が展開されている。この著者の業績については、すでに古津宜英氏による精密な書評・紹介（駒沢大学佛教教学部論集第十二号、昭和五六年十月）が出されており、全篇が緻密な文体で貫かれた本書に高い評価がなされている。

『起信論』の作者、訳者及びその成立背景には不明な点が多く、とりわけ大正から昭和の初期にかけて撰述者論争が行なわれて学界の注目を集めた。古来より「馬鳴造・真諦訳（新訳は実又難陀訳）」と呼称されてきたこの論について、望月信亨博士・村上専精博士などによって疑義が提出され、『起信論』の中国撰述説を生むに至った。これに関する望月博士の論稿は『大乘起信論の研究』（金尾文淵堂、大正十一年四月）に網羅されており、中国撰述説の代表例を知ることができる。これらの見解に対して反論のかたちでインド撰述説を提唱されたものは、常盤大定

博士・松本文三郎博士などの論文によってその所説が窺える。約半世紀前においては、『起信論』がインド撰述か中国撰述かという論点をめぐってその成立問題が論究されたといえる。本書における著者の立場は、あくまでも起信論の成立に関する資料論的位置づけを主眼とするものであり、自らの構築した資料論において『起信論』の撰述者の問題にも関説する。中国撰述説の論拠とされている考え方に對しては批判的な立場に立って本書の祖述がなされているといえよう。

さらに『起信論』が中国に伝播した直後においてこの論がどのように受容されたかは、論の成立問題と内的関連を有すると考えられるため、六世紀後半に作成された「三部作」を取上げている。また現存の真諦訳出とされる『起信論』テキストの研究を軸として、新旧両訳のテキストの比較研究がなされ、『起信論』の思想の骨格に関わる問題点が指摘される。そして『起信論』自身の思想をその表現形式に注目しつつ究明しているのである。本書における著者の研究は、中国佛教の枠内に止まらずインド佛教の原典研究や成立史的研究及びインド哲学の領域にまで溯る方法が導入されている。さらに『起信論』の成立に関連すると思われる伝承資料は、中国・日本において相当な量が残されているが、いまだ完全な整理がなされたとは言いがたい。著者は各種の経録をはじめとして、多岐にわたる諸資料を精査しつつ資料相互の関係を明瞭ならしめ、『起信論』の成立問題に對して綿密な研究が繰広げられている。

さて、はしがきによれば本書は、著者柏木弘雄氏が一九七五

年十月、東京大学に提出された学位請求論文であり、五年を経過して此に公刊の運びとなったものである。『起信論』の研究書としては数年前に平川彰博士の『大乘起信論』（佛典講座 22）が出版されて論の概要を知るに大いに便宜を与えている。これに統一して『起信論』の成立問題を論じた研究書『大乘起信論の研究』が刊行されたことは、成立問題について多くの学説が提出された歴史をもつ論であるだけに画期的なことであり、今後の『起信論』研究の指針となる書物であること間違いない。

本書の構成は、序論の一「本研究の目的と包含する資料の範囲、ならびに方法論」に懇切に示されており、各章の要約を知ることが出来る。本書の記述内容を知るうえに必要な項目を略示すれば次のごとくである。

序 論

第一章 起信論の成立に關連する資料の性格

第二章 起信論伝播直後の三部作

第三章 真諦訳と実叉難陀訳との比較研究

第四章 起信論思想の課題

上記の章題のもとに各章が多く節に分かれ、第三章を例外として他の三章の各々に緒言が付せられている。なお本書の末尾には『起信論』に對する明治以後の文献目録と和漢・印歐語の索引がある。

二

前掲の項目に従って本書の内容を簡約して紹介してみたいと

思う。

序論は、本研究の意図するところが単に『起信論』のインド撰述か中国撰述かという疑問に対する解答を見出すことではなく、成立に関する資料論としての立場の構築にあると述べる。

著者が『起信論』の思想内容を問題とする際の方法は、あくまでも資料論に資するものとして歴史的、発生的であり、従って『起信論』に対する自己自身の内面的理解を直接に論ずる方法は取られていない。すなわち、『起信論』の個々の教説を分析・比較・統合して得られた見解を、『起信論』の成立に関する資料論としての本質に適合するものであるか否かという厳正なる判断のもとに論旨の骨格の中に取入れている。次に『起信論』のテキストについて、多数の刊本と古写本を紹介し、テキスト下各々の性格及び校合上の資料的価値に関しても指摘がある。

『起信論』の本文自体の研究を目的としてその原型を求めんとする場合には、現存最古の註釈書である曇延の『大乘起信論疏』における所釈の本文や現存の大蔵經に収められる高麗藏本が有効であることが明らかにされる。また『起信論』の註解・研究に対する史的概観については、『起信論』中国伝播直後から江戸時代までの註釈書類を提示し、主要なものには解題を行ない、註釈者達にみられる個有な問題意識についてその説相の面から述べる。最後に、古註釈書たとえば『淨影疏』『海東疏』『賢首義記』にみられる經論の引用文を通してみた『起信論』の先駆思想を論述している。ただし註釈書における特殊の立場に、なるべく陥ることのない比較的 safely と思われる用例のみを取出

すことに注意が払われている。

第一章「起信論の成立に関連する資料の性格」は、『起信論』の成立・訳出に関して古来言及されてきた諸資料と、最近に至る研究文献とくに『起信論』撰述説の中で問題にされた種々の資料を整理しそれぞれの資料の性格を位置づけている。本章は四節に区分される。第一節「成立に関連する伝承資料の検討」では、經錄資料にみられる『起信論』の成立に関する記載事項を吟味し、また經錄以外の伝承資料の中からもそれを列挙して一一の資料の性格を論じている。現存する經錄の中で『起信論』の名を最初に記載したのは五九四年に法經等が編纂した『法經錄』でありこれを「衆論疑惑」に編入したのに対して、後代の撰述になる『歴代三宝紀』から『開元錄』までの諸經錄では真諦錄の中に相当せしめている。著者はとくに『起信論』の中国伝播後の比較的早期に編纂された『法經錄』『歴代三宝紀』『仁壽錄』の記述を論の成立に関する重要な資料とし、それらを真諦訳出の他經論との関連において解明する。第二節「馬鳴(Ma-yāgosa)造・真諦(Paramartha)訳について」では、『起信論』の伝播直後からすでに一般的に認められていたとされる「馬鳴造・真諦訳」の問題を伝記及び伝承並びに『起信論』との関係などの角度から論じている。『起信論』の作者を馬鳴であるとする伝承の出所を馬鳴の伝記・伝承・著述の性格などとの関連において確かめようと試みても現在の研究成果の範囲内においては明確な結論は得られない。論の成立問題を明らかにするためには、『起信論』における馬鳴の著者性の問題よりも翻訳者の

問題のほうがより結論的なものに触れるものであるとする。本節において著者は主に『統高僧伝』の真諦伝を抄出しつつ真諦の伝記を略説したうえで、『起信論』が果して真諦の訳出であったか否かについての見解を、真諦訳出経論にみられる訳語例という観点から考察している。その場合には、真諦三蔵に関するこれまでの研究成果たる宇井説及び望月説を取上げつつ問題点を究明する。第三節「起信論撰述問題に関する諸説の検討」では、『起信論』撰述論争の中で中国撰述またはインド撰述を主張した代表的な学説を挙げてその論拠の要点を示しつつ、著者による批判的見解がまとめられる。そこに概観される望月説をはじめとする学説の数は、約十四種の項目に及び、一の学説について問題整理が施される。これは『起信論』の成立史的な位置づけを見通す場合の資料の一つとして重要な作業であると思われる。『起信論』の撰述問題についての著者自身の立場は、第四節「起信論の成立に関する問題点の整理」において明らかになる。すなわち中国撰述の論拠とされる考え方に対する批判的立場を打出し、『起信論』自身の中心思想は、インド佛教における思想・教理の延長線上において捉えることのほうがより必然的であると判断されている。

第二章「起信論伝播直後の三部份」は、『起信論』に対する現存最古の註釈書である曇延の『大乘起信論疏』、『起信論』説を用いて中国佛教独自の主張を展開せしめた偽経『占察善惡業報経』、『起信論』の網格を採用しつつ独自の止観二門の教義を打立てた『大乘止観法門』について、これらを伝播直後の三部份

として論述している。まず『曇延疏』については、撰論師として有名な曇延が『起信論』を註釈する際の解釈法の特徴を明らかにし(第一節)、さらに彼の学系や、その系列に属する諸師における講説の態度をも明らかにする(第二節)。次に偽経『占察善惡業報経』については、そこに含まれる『起信論』説の特徴が、『占察経』上下二巻の内容を通して明らかにされる(第三節)。かつて望月博士は『起信論』の中国撰述説の論拠の一つとして、『占察経』に基いて『起信論』が成立したという見解を打出されたのであるが、著者の立論は『占察経』と『起信論』との前後関係を逆にしたものでありこの見地はまさに卓見であるといわねばならない。最後に『大乘止観法門』は、作者及び成立年代に疑問のある書物である。著者は近來の研究成果を総合的に判断して、『大乘止観法門』の撰者を曇遷もしくは彼の周辺に仮定することがもっとも穩当であると、『起信論』伝播直後の六世紀後半の著作に相当すると述べる。『大乘止観法門』の思想構造の中から『起信論』説依用の立場が明らかにされる(第四節)。

第三章「真諦訳と実叉難陀訳との比較研究」は、起信論の新旧両訳テキストの検討のもとに論の全文にわたる比較対照作業がなされ、比較研究から導き出される問題点が記述されている。古来、真諦訳と実叉難陀訳と名づけられてきた(P本とS本)両本が果して真諦あるいは実叉難陀による訳出とみなすことができるか否かを、直接に両本の文面に当たって検討するのであり、もっとも原本に近いと目されるテキストを底本として

新旧両訳の比較校合が豊富な註記を交えて行なわれる。実又難陀訳と称してきた新訳本(S本)は、旧訳本(P本)に比べてあまり依用されなかったテキストであるが、これを取込むことよって逆に旧訳本(P本)の訳語・訳風の一般の傾向がより闡明になる。また新訳本(S本)の成立についてはこれを実又難陀の訳とみなさない説もあって、後に玄奘梵訳説をも惹起せしめた。著者は実又難陀訳の『八十卷華嚴經』ならびに『七卷楞伽經』における訳語との関係にも注目する。その結果、新訳本(S本)が実又難陀による再訳本であることを、決定するまでには至らないにしても、積極的に否定する材料は存在しないことを明らかにしている。

三

『起信論』がインド撰述か中国撰述かという従来の論争を追うことのみよって成立問題の真相は究明されえないとされる著者の立場は、『起信論』そのものから読みとれる思想をその先駆思想との関連において明らかにすることをひとつの方法として、これを『起信論』の成立に関する資料論に資せんと企てる。それが第四章「起信論思想の課題」である。成立史的考察に主眼を置き、また『起信論』の所説の中に独自の表現形式を見出すことに留意している。本章は二節に区分され全体が一・二五頁にもわたるものであるが、その所論を、著者自ら述べているごとく「起信論自身の中心思想に認められる思想的必然性を確認するという観点から構成されたところの、一種のイン

ド撰述説である」(二八一頁)と位置づけている。ところで『起信論』の組織は、論の冒頭の帰敬偈に始まり、因縁分・立義分・解積分・修行信心分・勸修利益分の五分を形成し、最後は廻向偈で結ばれる。しかし『起信論』自体にみられる独自の表現形式に着目した場合には、便宜上、「外部形式」と「内容(内容形式)」とに区分することが可能であるとする。『起信論』説にとつてはもつとも形式的な思想の註表から出発して、進んで「内容」または「内容形式」とでもいうべきものに至りうると考えるわけである。

第一節「外部形式から見た起信論思想の課題」では、『起信論』の外部形式を形成すると思われる帰敬偈・因縁分(前分)と勸修利益分・廻向偈(後分)についてそこにみられる一一の教説を先行諸経論との対比において考察している。とくに造論の因縁を説示する因縁分には、摩訶衍の信根を起すに当たつての衆生の機根について述べられている。著者は、因縁分に所出の機根に関する問答体が、『十二門論』観因縁門及び『十住毘婆沙論』序品における問答体と類似した側面をもつことを指摘する。また『起信論』における大乘(摩訶衍)の語義用例を検討することを通して『起信論』の「外部形式」の例における問題を明らかにしている。

第二節「思想構築のための独自の形態」では、前節において明確になった「外部形式」が示唆する『起信論』の性格や示標に対して、本来の「内容」とみなされる立義分・解積分・修行信心分を取扱ったものである。『起信論』の中でもとくに理論

面が開陳されている箇所は解積分、問題の所在を示したとみなすべき箇所は立義分に相当する。著者は立義分が論の「外部形式」と『起信論』独自の論述「内容」という両者の問題意識が接合することによって成立している箇所であると指摘する。とくに「法・義」という基本的な概念についての本節における論述は、前節と密接に関わる問題であるといえる。さらに『起信論』の思想内容を形成する重要な概念すなわち「所言法者謂衆生心」や「如来藏」などについては、『起信論』の先駆となつた諸経論からの影響関係を究明する。『起信論』にみられる如来藏思想は、従来、とくに『楞伽經』との関連が強調されてきたが、著者は『楞伽經』のみに限定せず広く『不増不减經』『勝鬘經』などの如来藏経典群からの影響関係を逐次説示し、のみならず『華嚴經』『般若経』『維摩経』『智度論』などとの関連をも指摘する。先行諸経論を受容するにあつた『起信論』における受容形態の性格がここに明らかになる。次に「内容形式」を形成すると思われる諸概念の中から「心真如門・心生滅門」と「体・相・用」の三大義を考察の対象としてその資料的背景を探る作業がなされる。

以上のように『起信論』の思想内容に迫るための方法として表現形式に着目しその背景となる先行諸経論の所説を調査することは甚だ困難なことであるが、にもかかわらず仔細な研究が展開されている。それによって『起信論』が大乗の論書として一般性を具有する論であること及び『起信論』独自の主体的な内容をもつことが表出されることになるのである。

(昭和五六年二月、春秋社、A5版、vi十五〇六頁、索引二二頁)

賛助会員募集

次の要項で賛助(定期購読)会員を募集いたします。会員には本誌を発行後すみやかにお送りし、本会の出版物を割引価格でおわけします。

○年間会費(二冊分)

国内 一、七〇〇円
海外 二、〇〇〇円(円払い)

○申込み603京都市北区小山上総町
大谷大学佛教学研究室

*申込みは郵便振替が便利です。

(京都 25303 大谷大学佛教学研究室)